

第3章

1980年代のアメリカ陸軍指揮幕僚大学における教育改革

——学究と思索を重視する教育への変革はどのように成し遂げられたのか

木下 幸祐

序論¹

ベトナム戦争後に始まったアメリカ陸軍の改革では、軍人一人一人の能力を覚醒させ、これによって軍全体をプロフェッショナルな個人の集団へと成長させることが喫緊の課題とされた²。これは、兵力量と兵器性能の両面においてワルシャワ条約機構軍に劣る状況と、個人の能力の高さで補うためであった³。そうした改革のなかでとりわけ重要とされたのは、今後の陸軍改革を牽引し、将来的には将官として陸軍を背負って立つことになる若手少佐を教育するアメリカ陸軍指揮幕僚大学（U.S. Army Command and General Staff College）（以下、「CGSC」と表記）の改革であった⁴。

なかでも1980年代に実施されたCGSCの教育改革では、それまでの方針が大きく見直された。1970年代末までのCGSCでは、卒業後の職務に直結する知識と技術を教え込むことが何よりも優先された⁵。ところが、1980年代に入ると、そうした実用重視の教育に代わって、学問的な方法にしたがいながら戦争や軍事力の行使について思索させることを重視

¹ 本章は、「1980年代のアメリカ陸軍指揮幕僚大学における教育改革——学究と思索を重視する教育への変革はどのように成し遂げられたのか」『安全保障戦略研究』第4巻第1号（2023年12月）をもとに加筆修正を施したものである。

² 1973年、徴兵制が廃止され、アメリカ軍は兵力維持に困難をきたした。このため、志願兵の部隊を中核としながら、予備役を十二分に活用することにより、小規模かつ高品質の軍に作り替えることが改革の方針となった。この方針は「トータル・アーミー（Total Army）」構想と呼ばれた。松岡完『ベトナム症候群——超大国を苛む「勝利」への強迫観念』（中央公論新社、2003年）28–33、162–165頁。

³ 1970年代の中盤には、ワルシャワ条約機構軍は、伝統的に優勢であった兵力量のみならず兵器性能の面においてもNATO軍を上回るようになっていた。これに対してアメリカ陸軍では、同じ頃、国防予算の削減を受けて、兵員や装備品の充足率低下、ならびに装備品の不稼働と旧式化が進んでいた。アメリカ陸軍がワルシャワ条約機構軍と同等以上の兵力や高性能兵器を投入できる見込みは無かった。Frank N. Schubert and Theresa L. Kraus, eds., *The Whirlwind War: The United States Army in Operations Desert Shield and Desert Storm* (Washington, D.C.: GPO, 1995), pp. 25–26; The International Institute for Strategic Studies, *The Military Balance 1979–1980* (London: The International Institute for Strategic Studies, 1979), p. 110; U.S. Bureau of the Census, *Statistical Abstract of the United States: 1978 (99th edition)* (Washington, D.C.: GPO, 1978), p. 370.

⁴ CGSCの改革が重要と考えられていたことが分かる研究は次のとおり。Department of the Army, “Professional Development of Officers Study vol. 1,” Washington, D.C.: GPO, 1985; David D. Haight, “Officer Personnel Management in the Army: Past, Present and Future,” Carlisle Barracks, Pa.: U.S. Army War College, 2003; William M. Donnelly, “Professionalism and the Officer Personnel Management System,” *Military Review*, vol. 61, no. 5 (May–June 2013).

⁵ 木下幸祐「将校の育成とミリタリープロフェッショナルリズム——1970年代の米国陸軍指揮幕僚大学における教育哲学の変化」『安全保障戦略研究』第3巻第1号（2023年2月）121–122頁。

する教育（以下、「学究と思索を重視する教育」と表記）が教育の中心となっていった⁶。学究と思索を重視するという考え方は、その後も一貫して教育の基本方針として採用されており、現在に至るまで受け継がれている⁷。

では、それまでの教育をひっくり返すような教育改革は、どのように成し遂げられたのだろうか。とりわけ、一見すると実用性に乏しく、またプロフェッショナルな個人の育成とは関係ないようにも見える学究と思索を重視する教育は、どのような教育理念に支えられながら CGSC の隅々にまで行き渡り、どのような方法によりながら揺り戻しを招くことなく定着していったのだろうか。

先行研究において 1980 年代の CGSC 改革は、教育水準を段階的に高めていく多層的な構造へと変化していった CGSC の内部における、特定の教育コースに焦点を当てるかたちで論じられてきた。1980 年代、国防予算の増額を背景として、CGSC 内に複数の新しいコースが相次いで設けられた。1981 年 4 月には、伝統的な指揮幕僚将校課程（Command and General Staff Officer Course）（以下、「CGSOC」と表記）の下位に、諸兵科協同幕僚校（Combined Arms and Services Staff School）（以下、「CAS³」と表記）が設立された。さらに 1983 年 6 月には、CGSOC 修了に引き続き 1 年間の追加教育を授ける、いわば修士課程に相当する高等軍事研究校（School of Advanced Military Studies）（以下、「SAMS」と表記）が新設された。これまでの研究では、これらのコースのうちいずれか一つに焦点が当てられることが多く、例えば、1980 年代を通して CGSOC の教育内容がどのように改められたのか、あるいは新設された SAMS ではどのような教育が行われたのかといった点が論じられてきた⁸（図 1

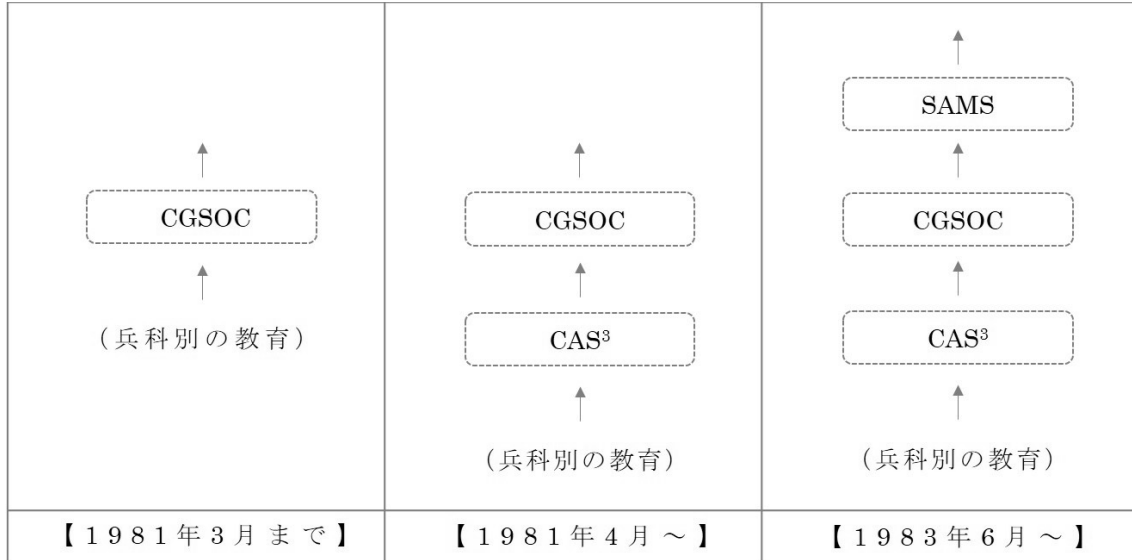
⁶ CGSC, “A Report of the United States Army Command and General Staff College 1984–85 Institutional Self-Study,” Ft. Leavenworth, Kans.: CGSC, 1985, pp. 18–19; Department of the Army, U.S. Army Command and General Staff College, “CGSC Circular 351-1: United States Army Command and General Staff College Catalog (Academic Year 1987–1988),” Ft. Leavenworth, Kans.: CGSC, 1987, p. 4.

⁷ 冷戦終結から現代までの期間、アメリカ陸軍の役割、ならびにその作戦のあり様や進め方など、戦争にまつわる事柄は時間の経過とともに移り変わった。それにもかかわらず、学究と思索を重視するという考え方は CGSC の基本方針として採用され続けている。Department of the Army, U.S. Army Command and General Staff College, “CGSC Circular No. 351-1: United States Army Command and General Staff College Catalog (Academic Year 1987–88),” Ft. Leavenworth: CGSC, 1987; Department of the Army, U.S. Army Command and General Staff College, “CGSC Circular No. 351-1: United States Army Command and General Staff College Catalog (Academic Year 1994–95),” Ft. Leavenworth: CGSC, 1994; U.S. Army Command and General Staff College, “CGSC Circular No. 351-1: United States Army Command and General Staff College Catalog (Academic Year 1998–99),” Ft. Leavenworth: CGSC, 1998; U.S. Army Command and General Staff College, “CGSC Circular 350-1: U.S. Army Command and General Staff College Catalog (2020–2021),” Ft. Leavenworth: CGSC, 2021.

⁸ 1980 年代の CGSOC について論じた代表的な研究は次のとおり。Michael D. Stewart, “Raising a Pragmatic Army: Officer Education at the U.S. Army Command and General Staff College, 1946–1986,” Ph.D. diss., University of Kansas, 2010; Janine Davidson, *Lifting the Fog of Peace: How Americans Learned to Fight Modern War* (n.p.: University of Michigan Press, 2011); Richard M. Swain, “Filling the Void: The Operational Art and the U.S. Army,” in B. J. C. McKercher and Michael A. Hennessy, eds., *The Operational Art: Developments in the Theories of War* (Westport, Conn.: Praeger Publishers, 1998). SAMS についての代表的な研究は次のとおり。Kevin C. M. Benson, “Educating the Army’s Jedi: The School of Advanced Military Studies and the Introduction of Operational Art into U.S. Army Doctrine 1983–1994,” diss., University of Kansas, 2010; Kevin C. M. Benson, “School of Advanced Military Studies Commemorative History 1984–2009,” Ft. Leavenworth, Kans.: CGSC, 2009; Jeffrey J. Goble, “Wants and Needs: SAMS Relationship with the Army,” Ft. Leavenworth, Kans.: CGSC, 2008; Huba Wass de Czege, “The School of Advanced Military Studies: An Accident of History,” *Military Review*, vol. 89, no. 4 (July–August 2009). 厳密に言うと SAMS という呼び名が用いられたのは 1985 年以降であり、1983 年には高等軍事研究プログラム（Advanced Military Studies Program）と呼ばれていた。本章は、広く使用されている SAMS

を参照)。

図1 1980年代のCGSCにおける教育構造の多層化



CAS³ : 少佐昇進前のすべての将校が履修

CGSOC : 任官年度が同じ将校のなかから選抜された40パーセントが履修

SAMS : CGSOCを履修中の将校のなかから選抜されたごく一部が履修

(出所) 筆者作成。

しかし、こうした先行研究のアプローチでは、1980年代におけるCGSCの教育の変化が、CGSC内部のすべてのコースを見渡したかたちで捉えられてこなかった。この点に議論の余地が残されている。

そこで本章では、教育構造が多層化していく過程において区切りとなるそれぞれの時期に注目し、それぞれの時期で、どのような考え方がすべてのすべてのコースに共通していたのか、あわせて、どのような方法によって学究と思索を重視する教育がCGSC全体に広げられたのかを明らかにする。第一節ではCAS³とCGSOCの二層構造で教育が行われた時期を、第二節では、CAS³からSAMSまでの三層構造が構築された時期を検討する。結論では、両節で明らかにした事項をひと続きのものとして捉え直し、これにより1980年代のCGSC改革を支えた教育の理念と改革の方法論を、CGSC全体を見渡したかたちで描き出すことを試みる。そのうえで、この改革が示唆することについて、いくつかの考察を提示したい。

の名称を用いる。Benson, "Educating the Army's Jedi," p. 103.

1. 1980 年代初頭：その後の基礎となった教育理念と方法論の誕生

(1) 1970 年代への反省からの出発

1981 年 4 月の CAS³ 設立を境として、CGSC の教育は CAS³ と CGSOC による二層構造で行われるようになったが、この時期、CGSC 内部では二つの新しい考え方が広まりつつあった。一つは、CGSC では論理的に考える能力を何よりも優先して修得させなければならないという考え方である。もう一つは、教育法に関する内容であり、単に知識や技術を授けるだけの教育法では論理的に考える能力を修得させることはできない、したがって CGSC ではそうしたやり方とは異なる教育法を用いなければならないという考え方であった。

これらの新しい考え方は、1970 年代後半に CGSC に広められた教育方針への反省にもとづいており、その方針への批判がきっかけとなって広がっていった。知識と技術を修得させておけば自然と考える力は伸びていくとする、1970 年代後半の考え方は間違っていた。この誤りのために、現在の CGSC の教育は、論理的に考える力を身につけさせることをおざなりにしているのも同然となっており、プロフェッショナルな将校を育成する教育とは言えない。このように考えられるようになった。

1970 年代後半の教育は、訓練ドクトリンコマンド (Training and Doctrine Command: TRADOC) 初代司令官ウィリアム・デピュイ (William E. DePuy) 大将によって制度化されたものであった。彼は、戦闘の指揮や平時の業務に直接的に役立つ知識と技術こそが、将校がプロフェッショナルとして身につけなければならない専門的能力のなかで最も優先すべきものであると位置づけた⁹。さらに、彼は、そうした実用的な知識と技術の修得に専念させておけば、特別な働きかけをせずとも学生の思考力は自然に伸びると主張し、自身の教育観を CGSC に押しつけた¹⁰。デピュイが CGSC にもたらした影響は、彼が 1977 年に退役した後も残り続けた¹¹。

しかし、1980 年代に入ると、デピュイの方針にもとづいて行われていた CGSC の教育が批判され始めた。1982 年 2 月、陸軍省のガイ・メロイ (Guy S. Meloy) 少将は陸軍参謀総長に宛てた報告書のなかで、CGSC の中心的なコースである CGSOC が、10 ヶ月の教育期間で教えることができる限界に無頓着な詰め込み教育となっており、学生が能動的に考えをめぐらせる時間がまったく無いと指摘した。1970 年代後半に実用重視の教育に

⁹ 木下「将校の育成とミリタリープロフェッショナリズム」111-115、117、120 頁。

¹⁰ John L. Romjue, Susan Candy, and Anne W. Chapman, *Prepare the Army for War: A Historical Overview of the Army Training and Doctrine Command, 1973-1993* (Honolulu: University Press of the Pacific, 2002), p. 23; Robert E. Shea Jr., "An Examination of Credibility in Military Education," *Military Review*, vol. 55, no. 3 (March 1975), pp. 84-85.

¹¹ 1978 年に陸軍省が実施したアンケート調査の結果は、①陸軍将校の間には事務処理に秀でる人物を高く評価する気風が広がっていること、②多くの高級将校が CGSC は実用的な知識と技術を教え込むことに専念すべきだと考えていることを示しており、デピュイが退役した後も彼の考え方は広く支持されたことが伺える。Headquarters, Department of the Army, "A Review of Education and Training for Officers vol. 1 An Overview," Washington, D.C.: GPO, 1978, pp. L-2-10 to L-2-12.

重点が置かれた結果、CGSOCのカリキュラムには役に立つとされる知識や技術を教え込む授業が毎年追加され、教育内容は増加の一途をたどった。メロイは、そのような教育を「1マイルの幅と1インチの深さ」と表現した¹²。このほか、授業のほとんどが1人の教官が60名の学生を相手にする講義形式で行われ、それぞれの授業では、基礎的な知識や物事を行う際の決められた手順を暗記したかどうかを確認するテストが繰り返されていた¹³。

こうした教育を見直したのは、皮肉にもデピュイの在職中に彼のもとで手腕を振るい、ついにはその後継者となったドン・スターリー (Donn A. Starry) 大将であった。TRADOC 第二代司令官に就任したスターリーは、陸軍の将校は既知の業務を要領よくこなすことはできるが、その一方で、未知の問題、例えば、次の戦争をどのように戦うかという問題や、軍の改革で何を成すべきかといった問題を解決する能力が欠けており、このことが軍の改革を停滞させる要因になっていると判断した。スターリーは、そうした能力は論理的に考え抜くことによってはじめて獲得できるものであり、今後のCGSCの教育では、学生に思考を促す教育を行い、これによって彼らを知的に鍛えなければならないと繰り返し主張した¹⁴。スターリーは、自身も一翼を担ったデピュイの改革を省み、CGSC教育を抜本的に見直さなければ陸軍の将来は危ういと危機感を抱いていた。

(2) CAS³を起点とした教育理念の制度化

スターリーが自身の教育理念をかたちにする場所として選んだのは、新たに設立されたCAS³であった。当時のCGSCでは、大学内の教育方針に対する外部からの干渉を拒む教官が少なくなかった。スターリーは、彼らが公式の場面だけでなく非公式な場面においても、デピュイの教育改革に抵抗したことを知っていた¹⁵。そこで彼は、CGSCの中心的なコースであるCGSOCには直接介入せず、これを学校長以下に委ねる一方で、新設校CAS³で自身の理念を具体化し、そこから数年間をかけてCGSC全体に教育改革を広げていく方法

¹² Guy S. Meloy, "Memorandum thru Deputy Chief of Staff for Operations and Plans for Chief of Staff, United States Army, Subject: Evaluation of CGSC Curriculum, Tab C," Washington, D.C., Office of the Deputy Chief of Staff for Operations and Plans, dated 1 February, 1982, pp. 1, 3.

¹³ Stewart, "Raising a Pragmatic Army," pp. 276, 294, 308. このほか、①教官陣の能力がおそらく低い、②教育者としてふさわしくない将校が教官職に配置されている、③学生が教官を尊敬していないという指摘がある。Meloy, "Evaluation of CGSC Curriculum, Tab C," p. 2; Huba Wass de Czege, "Final Report: Army Staff College Level Training Study," Carlisle Barracks, Pa.: U.S. Army War College, 1983, p. 8; Stewart, "Raising a Pragmatic Army," p. 258.

¹⁴ スターリーは、自らの主張を、陸軍戦略大学 (Army War College) での研究会や陸軍機関誌『ミリタリーレビュー』誌で繰り返した。Lewis Sorley, ed., "Press On!: Selected Works of General Donn A. Starry vol. 1," Ft. Leavenworth, Kans.: Combat Studies Institute Press, 2009, pp. 111–112; Donn A. Starry, "To Change an Army," *Military Review*, vol. 63, no. 3 (March 1983), p. 26.

¹⁵ Stewart, "Raising a Pragmatic Army," pp. 301–302. スターリーは退役後のインタビューで、1970年代後半にCGSC学校長を勤めたジョン・クシュマン (John H. Cushman) 少将、ならびにクシュマンのアドバイザーであり、30年にわたりCGSCで教授を勤めたイバン・ビルラー (Ivan J. Birrer) 博士について、デピュイやTRADOCに対して非協力的であったのみならず、話し合いさえも受け付けられないほどに独善的であったと苦々しく回顧している。Lewis Sorley, ed., "Press On!: Selected Works of General Donn A. Starry vol. 2," Ft. Leavenworth, Kans.: Combat Studies Institute Press, 2009, pp. 1111, 1125–1127.

を採用した¹⁶。

スターリーは、CGSC を監督する TRADOC 司令官としての立場から、CAS³ が開校するまでの過程に積極的に関与した。そこでスターリーは、二つの指針を出した。第一の指針は、論理的に考える力の修得と向上に専念せよという内容であり、第二は、考える力を伸ばすという目標に見合った教育法に集中せよという内容であった。

第一の指針に関して、CAS³ は幕僚を養成する学校であったが、スターリーは、論理的に思考する能力を、幕僚業務を遂行するうえでの基礎中の基礎、かつ幕僚としての良し悪しを左右する重要な要素と位置づけた。同時にスターリーは、知識や技術の修得を教育の中心的目標とはさせなかった¹⁷。この結果、講義形式の授業は CAS³ から取り除かれた。知識や技術を授ける教育はすべて、入学前に学生が自習形式で履修する通信教育によって行われた。CAS³ は、当時の CGSOC のような詰め込み型の教育にはならなかった¹⁸。

第二の指針にもとづき、スターリーは、CAS³ を、学生一人一人が自主的に思考し、他の学生との共同作業や討論を通じてさらに深く思考する、能動的かつ双方向的な学習の場所とすることを目指した。彼は、①教官の指導のもとで少人数の学生が主体的に発表や討論、研究を行うゼミナール形式の授業の導入、②そうした教育方法にふさわしい見識と人格を備えた教官の選抜と配置を命じた¹⁹。その結果、CAS³ ではすべての授業が 12 名の学生で構成されるグループを単位として行われ、それぞれのグループには、過去に大隊長として高い評価を受けた中佐が専属教官として配置された。9 週間の教育期間を通してグループの編成は固定され、学生たちには問題の所在を明らかにし、解決策を検討し、その解決策の妥当性を論理立てて説明することが毎日のように求められた。専属教官の役割は、学生の考える力を伸ばすことであり、CGSOC の教官のように教壇のうえから知識や技術を授けることではなかった。専属教官は、すべての授業で討論の進行役やまとめ役となり、学生の様子を毎日つぶさに観察して一人一人の思考力のレベルや性格にあわせた質問や助言

¹⁶ Ralph Ekwall and Roland D. Griffith, "Constructing a Cube: A History of the Combined Arms and Services Staff School," Ft. Leavenworth, Kans.: Combined Arms and Services Staff School, CGSC, 1994, p. 1-7; Sorley "Press On! vol. 1," pp. 111-112; Sorley "Press On! vol. 2," pp. 1127, 1212-1213.

¹⁷ 幕僚としての基礎的な能力について、スターリーは、①複雑な現実の事象を、それを構成する要素に分けて解明する分析的思考力、②分析的思考で得られたいくつかの要素によって、別々のものをまとめる総合的思考力、③抽象的な思考によって物事の本質を理解し、かつ個別の事象や経験の持つ意味を解釈する概念化能力、④個別の特徴と物事の本質、あるいは末端と全体を要約する説明能力と定義した。Ekwall and Griffith, "Constructing a Cube," p. 1-7. 知識や技術を教えることは目標ではなく、思考する能力を伸ばすことが目標であるというスターリーの考え方は、その後も長く受け継がれており、1990年代になってもCAS³の教官陣は「思考することについて学ぶ場所」あるいは「何を考えたらいいかではなく、どのように考えるのかについて教える学校」という表現で、自分たちの学校を『ミリタリーレビュー』誌で説明している。J. Steve Patterson, "CAS³: Investment in the Future," *Military Review*, vol. 74, no. 5 (May 1994), pp. 25-26; Albert E. Bryant and Joan Dietrich Silver, "CAS³: Fifteen Years Later," *Military Review*, vol. 76, no. 6 (November-December 1996), pp. 67-68.

¹⁸ Robert Van Steenburg III, "What's a 'Cass Cube'?" *Military Review*, vol. 61, no. 5 (May 1981), pp. 25-26; Michael R. Anderson, "Evaluating CAS³ Instruction," *Military Review*, vol. 64, no. 7 (July 1984), pp. 28, 34. 新しい知識や技術の教育をカリキュラムに追加したほうが良いという意見は、CAS³ の教育に関する基本的な考え方は矛盾するという理由で却下された。

¹⁹ Ekwall and Griffith, "Constructing a Cube," p. 1-7.

を与えた²⁰。

スターリーの考え方は、1980年代中盤以降のCGSC改革に大きな影響を与えた。スターリーのもとでCGSC学校長を務めたウィリアム・リチャードソン（William R. Richardson）中将や副校長ロバート・フォーマン（Robert H. Forman）少将は、1980年代後半までCGSCを監督するポストを歴任し、スターリーの理念をさらに広めていった²¹。

2. 1980年代の中盤から終わりまで：スターリーの教育理念の普及

（1）予測困難なほど変化のペースが増大した時代への危機感

1983年6月にSAMSが設置され、CGSCの教育構造は三層体制へと改められた。この時期には、スターリーの理念をさらに発展させた考え方が広まりつつあった。それは、CGSCでは論理的に思考する能力をさらに高い水準まで引き上げなければならないという考え方であった²²。

この考え方の背景には、このままだと陸軍が科学技術の進歩や社会の変化がもたらす戦争の変化に適応できない組織になってしまうのではないかという危機感があった。スターリーがTRADOC司令官を務めていた当時、CGSC学校長のリチャードソンと、彼のもとで教官を勤めていたフーバ・ワス・ド・セーグ（Huba Wass de Czege）大佐は、戦いが進むテンポや兵器の性能が発展するスピードが過去とは比較にならないほどに速くなったこと、そして戦いの様相の変化が年々激しさを増していることに注目していた。彼らは、予想もできないほどにダイナミックに、かつ目まぐるしく戦争が変化するなかでは、戦場での指揮においても平時の業務においても、判断の誤りが壊滅的な結果を招きかねない、したがって将校一人一人の考える力をもっと高めなければ、次の戦争に勝利することは困難であ

²⁰ Steenburg III, "What's a 'Cass Cube'?" pp. 26–27; Anderson, "Evaluating CAS³ Instruction," pp. 27–28. 少人数制の教育が特に重視されたことは、教育施設の設計や教官の資格要件からも伺える。CAS³の校舎には収容人数が12名の教室だけがあり、それ以上の人数の学生を収容できる教室や、講義形式の授業に使用できる大講堂は無かった。また、教官には、学生にとっての憧れの存在となることが要求された。Bryant and Silver, "CAS³: Fifteen Years Later," pp. 67–69.

²¹ フォーマンは、1979年から1981年6月までCGSC副校長を勤めたが、この期間中、CAS³設立の責任者であった。彼は、スターリーとともに少人数制の教育の実現に力を尽くした。リチャードソンは、1979年10月から1981年8月までCGSC学校長を勤めた。CAS³についてブリーフィングを受けたリチャードソンは強い関心を持ち、フォーマンを積極的に後押しした。Ekwall and Griffith, "Constructing a Cube," p. 1-6. リチャードソンは、CGSC学校長を離任した後は、1983年3月まで陸軍省でCGSCの監督責任を持つ作戦担当陸軍参謀次長（Deputy Chief of Staff for Operations and Plans）を、そして1986年6月に退役するまでCGSCを直接監督するTRADOC司令官を歴任した。リチャードソンはCGSC学校長就任から数えて7年連続でCGSCの改革に関与できる役職に就いてリーダーシップを発揮した。同様、フォーマンは、CGSC副校長を離任した後は、1983年7月から1985年7月まではTRADOC参謀長の立場から、1985年7月から1987年8月まではTRADOC副司令官の立場からCGSC改革を後押しした。Romjue, Candy, and Chapman, *Prepare the Army for War*, pp. 151–152, 162, 167–168, 173, 180, 186.

²² CGSC, "1984–85 Institutional Self-Study," pp. 45–46. このほか1985年に陸軍省が作成した報告書も、将校の育成においては、その判断力を向上させて戦争の進化に対応することが重要であると結論付けている。Department of the Army, "Professional Development of Officers Study vol. 1," p. IV.

ると結論付けた²³。

リチャードソンとセーゲは、論理的に思考する能力をさらに高い水準に引き上げるためには、もう一度 CGSC の教育を見直し、自らの頭脳で考え抜くという意味でこれまで以上に厳しく学生を鍛えなければならないと考えた。これをはっきりと言い表したのはリチャードソンであった。1983 年 3 月に TRADOC 司令官に就任したリチャードソンは、CGSC の教官たちに向けて、学生たちの思考力の質を高めることが最も重要な課題であり、そのためには基礎的な知識や型通りのやり方を教え込むだけの機械的な教育を取り除かなければならないと訓示した²⁴。

彼らが CGSC 教育の刷新において重視した点は二つあった。第一は、戦争や軍事力行使を学問としての作法に則って学ばせ、そして、その学問（以下、「用兵学」）を修めさせることであった。第二は、CGSC をこれ以上はできないというほどまでに能動的で双方向的な学習プロセスに作り替えることであった。

用兵学について、リチャードソンとセーゲは、軍事的事象を解釈し、分析し、総合するための枠組みであり、将校の判断力を強化するものと位置付けた²⁵。その内容は①軍事力の行使に関する理論や概念を用いて事実を観察し、観察によって得られた知識を体系立てて事実を解釈し、最終的には個々の事実を説明できる理論や抽象的に思考するための概念を創り出す研究、②どのような軍事的、または社会的な条件のもとでどのような戦いの進め方が奏功したのか、そして、条件がどのように変わったときにその戦いの進め方が効力を失ったのかに焦点を当てた軍事史の研究の二つに要約できる。セーゲは、用兵学を修めることにより、従来の戦い方を変えなければならないタイミングを察知する力や、状況の変化にあわせて新しい戦い方を生み出す力が養われると説明した²⁶。

このように用兵学は、理屈ばかりで実際の業務では役に立たない将校を産み出す教育とは見做されず、むしろ、戦争の変化が加速する時代において、次の戦争を勝利に導くことができる運用者や、陸軍改革をけん引する実務家を育てる教育として位置づけられたのである。この点についてセーゲは「いつの時代も真に優れた実務家は、きまって用兵学によ

²³ CGSC 学校長に就いていた時、リチャードソンは、①CGSC の教育は知識や技術を教え込むだけでは不十分であり、それらを現実に応用する能力を向上させなければならない、②卒業後の業務を要領よくこなす将校を育てるのみならず、将来の将官としてふさわしい思考様式を備えた将校を育てなければならないと述べている。William R. Richardson, “The Leavenworth Influence on Today’s Army,” *Military Review*, vol. 61, no. 5 (May 1981), p. 17. 同様に、セーゲは、CGSC のみならず陸軍省や TRADOC でも広く読まれた研究報告書のなかで、CGSC がより高い思考力を備えた卒業生を毎年送り出すことによってはじめて、陸軍は素早く、かつ柔軟に戦争の進化に対応できる組織になることができると説明している。Czege, “Final Report,” pp. 4, A-6 to A-8.

²⁴ Stewart, “Raising a Pragmatic Army,” p. 270.

²⁵ William R. Richardson, “Kermit Roosevelt Lecture: Officer Training and Education,” *Military Review*, vol. 64, no. 10 (October 1984), p. 33; Huba Wass de Czege, “How to Change an Army,” *Military Review*, vol. 64, no. 11 (November 1984), pp. 34, 45–46.

²⁶ Czege, “Final Report,” pp. A-6 to A-8; Czege, “How to Change an Army,” pp. 34–35, 39–40. セーゲは、CGSOC の卒業生を例に挙げて、彼らは知識や技術を授けるだけのやり方で育てられたため、まるでクッキーの抜き型のような教条的な解決法しか持ち合わせておらず、状況に応じて自身の頭脳で考えて判断する能力がまったく欠けていると説明した。Benson, “Educating the Army’s Jedi,” pp. 89–90.

く通じている」と述べている²⁷。

CGSC をさらに能動的で双方向的な学習プロセスに作り替えるにあたり、リチャードソンとセーゲは、CGSOC における教官 1 人あたりの学生数をもっと少なくすること、そして、見識と人格の面で優れているだけではなく学問的な訓練を受けた教官を集めることが不可欠であると判断した。1983 年初頭には、CAS³ の教育が高く評価されたことを受けて、CGSOC でも少人数制教育がゆっくりと導入され始めていた。講義形式の授業は減り、代わって、1 人の教官が 12 名ないし 15 名の学生を担当する討議形式の授業が増加した²⁸。リチャードソンとセーゲは、1 人の教官が 5 名ないし 6 名を教育する形式が CGSOC に最も適していると考えていた。さらに、セーゲは、教育の良し悪しを決定づけるのは、何を教えるか、つまりカリキュラムの内容ではなく、誰が教えるかであると信じて疑わなかった。彼は、教官の資格要件として、①修士号以上の学位を有すること、②過去の教官および部隊指揮官としての勤務において優秀と評価されていること、③少なくとも向こう 3 年間継続して教官として勤務できることの三つが必要だと考えていた²⁹。

(2) 既存の制度から離れた SAMS

リチャードソンとセーゲは、自らの教育理念を中心的なコースであった CGSOC ではなく、その外部に新設された SAMS で具体化した。この手法は、かつてスターリーが CAS³ で自身の教育理念を実現した方法と同じであった³⁰。

当時、リチャードソンとセーゲが CGSOC で教育理念を実現することは極めて困難であった。その障壁となっていたのは、CGSOC が担っていた選抜と配分の機能、すなわち、同年代の将校のなかから必要な人数の優秀な人物を選び出し、そして、教育修了後には彼らを要職に配置するという制度的な役割であった。CGSOC の学生数は、彼らを卒業後に配置するポストの数にあわせて、陸軍省によって毎年約 900 名と決められていた。1981 年と 1983 年には、CGSOC における少人数制教育の推進を目指して学生数の削減が検討されたが、実現には至らなかった³¹。というのも、そうした大所帯のコースで教官 1 人に対して 6 名の学生という態勢を確保するには、相当数の優秀な教官を配置する必要があったが、当時の陸軍省にはその余裕がなかったためである。当時、徴兵制の廃止と募集難に対応するため、リクルート部門や予備役将校訓練課程 (Reserve Officer Training Corps)、新規入隊者の訓練所にも優秀な将校を配置する必要があった³²。

²⁷ Czege, "How to Change an Army," p. 45.

²⁸ Czege, "Final Report," pp. 52, D-2. リチャードソンは CGSC 学校長在任中に、CGSOC での少人数制教育の実現に努力していた。Richardson, "The Leavenworth Influence," p. 17.

²⁹ Benson, "Educating the Army's Jedi," p. 103.

³⁰ リチャードソンとセーゲはともに、SAMS について、組織立てた検討によって設立されたコースではなく、二人の発案で設立されたと述べている。Interviewed by Michael W. Ackerman, "Senior Officer Oral History Program, Project 1987-18, General William R. Richardson, U.S. Army Retired," Carlisle Barracks, Pa.: U.S. Army Military History Institute, 1983, pp. 318, 335; Czege, "An Accident of History," pp. 102, 104.

³¹ Stewart, "Raising a Pragmatic Army," pp. 292-294; Richardson, "The Leavenworth Influence," pp. 16-17.

³² Czege, "Final Report," pp. 57, B-1-34. 陸軍省は 1982 年 5 月に CGSC の教官職に優秀な将校を優先して配

こうした制約を踏まえ、リチャードソンとセーゲは、CGSOC の外部に設立した SAMS を既存の人事制度から独立させることによって、自分たちの教育理念を忠実に具体化した³³。リチャードソンは陸軍省と粘り強く交渉し、SAMS では教官 1 人あたりの学生数を 6 名に維持すること、そして特に優秀な教官を配置することを認めさせた³⁴。CGSOC と異なり、SAMS の学生数は小規模だった。学生数は初年度には 13 名、翌年度には 25 名、3 年目には 48 名と年々増加したが、その人数は、確保できた優秀な教官の人数によって決定された。SAMS の学生には教育修了後に師団や軍団の作戦幕僚に就くことが約束されていたが、そうした卒業後のポストの数に入学者数を合わせることはなかった³⁵。この他、SAMS の教育は、CAS³ と同様、12 名の学生で構成するグループを単位として行われたが、各グループには 1 年間の教育期間を通して専属教官が配置されるのみならず、授業内容に関して高い専門性を有する博士号保有者が加わる態勢が整えられていた³⁶。

また、リチャードソンとセーゲは、SAMS にふさわしい学生を集めるために、CGSOC とは異なる、入学選抜と卒業後補職に関する制度を陸軍省に認めさせた。当時の CGSOC では、入学者の選定は陸軍省が一括して行っており、勤務成績だけが選抜の基準となっていた。これに対し、SAMS では、はじめに校長と教官が選抜試験を行い、その後、学校側が適格と認めた候補者のなかから陸軍省が入学者を決定するという方式が採用された。選抜試験では、ジレンマを含む軍事的な問題に対する解決策を論じる小論文の作成と面接が行われ、①論理的に考える力、②自身の主張を論理立てて説明する力、③たとえ階級が上位の相手であっても反対意見には論じ返すことができる意思の強さが評価された³⁷。卒業後の補職についても、CGSOC 卒業生にはその後の昇進を有利にするポストに配置されることが約束されていたのに対し、SAMS 卒業生は、CGSOC 卒業生と比較すると 1 年間多く教育を受けていたにもかかわらず、補職の面では CGSOC 卒業生と同等に扱われた。こ

置するという方針に改めたが、その効果は翌年になっても現れなかった。Czege, "Final Report," p. 8; Stewart, "Raising a Pragmatic Army," p. 258. このほか、TRADOC は 1980 年の部内改編の際、装備開発や訓練の改善を所掌するポストを増やすために CGSOC 教官の定数を削減していた。Stewart, "Raising a Pragmatic Army," p. 256.

³³ Czege, "An Accident of History," pp. 103–104; Ackerman, "Senior Officer Oral History Program, William R. Richardson," pp. 310–311.

³⁴ Stewart, "Raising a Pragmatic Army," p. 306. リチャードソンからの強い要請を受けて、陸軍省は 2 年間という条件付きで、陸軍戦略大学 (Army War College) への入学が決まっていた 3 名ないし 4 名の中佐もしくは大佐を、毎年 SAMS に配置した。セーゲは、彼らを、その 1 年目には SAMS の学生と同じ内容をすべて学ばせ、その 2 年目には学生たちのグループの専属教官に任命した。Benson, "Educating the Army's Jedi," p. 92; Romjue, Candy, and Chapman, *Prepare the Army for War*, p. 37; Bankus, "Senior Officer Oral History Program, Leonard Donald Holder," p. 319.

³⁵ 実際、1986 年に学生数を増加する計画が持ち上がったが、この計画は、優秀な教官が足りないという理由により中止された。Interviewed by Brent Bankus, "Senior Officer Oral History Program, An Oral History of Leonard Donald Holder, Jr., U.S. Army Retired," Carlisle Barracks, Pa.: U.S. Army Military History Institute, 2015, pp. 59–60; Benson, "Educating the Army's Jedi," pp. 103–105.

³⁶ Benson, "Educating the Army's Jedi," pp. 92–93; Interviewed by Steven G. Fox, "Senior Officer Oral History Program, Project 2001-12, Colonel (Retired) Richard Sinnreich," Carlisle Barracks, Pa.: U.S. Army Military History Institute, 2001, pp. 36–37.

³⁷ Benson, "Educating the Army's Jedi," pp. 26–28; Fox, "Senior Officer Oral History Program, Richard Sinnreich," p. 37.

の結果、キャリアを有利にすることを動機とする学生はSAMSへの進学を避け、代わって、論理的に考える力を伸ばすことを渴望する学生が集まった³⁸。

教育の側面では、SAMSはCGSOCを基礎としつつ、段階的に教育の水準を高めていくように設計された³⁹。例えば、作戦ドクトリンに関する教育では、CGSOCでは現行のドクトリンが定める方法論とその背景にある軍事理論を理解し、ドクトリンを欧州でのワルシャワ条約機構軍との戦いに応用することが目標とされていた。一方、SAMSでは、現行ドクトリンの学習のみならず、結果的にその改定につながるほどの、軍事力の行使について深く考え抜く研究が行われた⁴⁰。SAMSの学生たちは、近代以降の軍事理論や概念を用いながら大規模な陸上戦役に関する軍事史を研究し、その成果をもとに次の戦争をどのように戦うかを検討した。1986年に陸軍の作戦ドクトリンが改訂されたが、その草稿は、SAMSの学生たちが代々引き継ぎながら4年間をかけて書き上げたものであり、そのなかには作戦術（operational art）という新たなコンセプトが盛り込まれていた⁴¹。

結論

1980年代、学究と思索を重視する教育がCGSCに定着していった背景には、二つの教育理念があった。第一は、プロフェッショナルな将校を育成するうえでCGSCが果たさなければならない最も重要な役割は、論理的に思考する能力を伸ばすことであるという考え方であった。第二は、論理的に思考する能力は学究と思索によってはじめて育まれるものであり、知識や技術を教え込む教育法では決して向上しないという考え方であった。この教育理念は、1980年代を通じて一貫して維持され、教育構造が複層化するにつれて、よりはっきりと強調されるようになった。

この教育理念が有効であることを実証したのは、CAS³の教育であった。スターリーの理念を忠実に具体化したCAS³は高く評価され、1980年代中盤以降のCGSC改革の基礎となった。スターリーは、未知の問題を論理的に検討し、解決策を導き出す能力こそが、次の戦争に備えるうえで最も重要であると考えた。そのため、彼は、能動的で双方向的な教育

³⁸ Michael D. Wyly, "Educating for War," *Marine Corps Gazette*, vol. 72, no. 4 (April 1988), p. 28. 学生のなかには、CGSOCで受ける教育は重要ではなく、CGSOC入学者に選抜されること、ならびに卒業証明書を得ることの二つだけが重要であると考える者が少なくなかった。Stewart, "Raising a Pragmatic Army," pp. 306, 308.

³⁹ Christopher L. Baggot, "The School of Advanced Military Studies in the 21st Century," Ft. Leavenworth, Kans.: CGSC, 1998, pp. 27-28. アメリカ陸軍の教育改革を注意深く観察していたアメリカ海兵隊のマイケル・ウィリー（Michael Wyly）大佐も、1988年、SAMSでの最高水準の教育を可能にしている理由はCGSOCがSAMSの基礎となっているからであると述べている。Wyly, "Educating for War," p. 30.

⁴⁰ Czege, "Final Report," pp. 4, F-4 to F-5.

⁴¹ Swain, "Filling the Void," p. 164; Bankus, "Senior Officer Oral History Program, Leonard Donald Holder," pp. 47-49. 作戦術については、齋藤大介「戦争を見る第三の視点——『作戦術』と『戦争の作戦次元』」戦略研究学会『戦略研究 12』（2013年1月）；齋藤大介「AirLand Battle 再考——軍事思想の観点から」航空自衛隊幹部学校『鵬友』第37巻第6号（2012年）を参照。

にふさわしい見識と人格を備えた教官を CAS³ に集め、そこで自身の教育理念を制度化した。その後、スターリーの理念を受け継いだ高級将校たちが、さらに高い水準にまで論理的に考える力を伸ばすことを目指し、SAMS を設立した。

1980 年代を通して、学究と思索を重視する教育を CGSC 全体に広げる際に使用された方法は、例外なく、CGSC の中心的なコースである CGSOC に直接手を加えるのではなく、その周縁部に新しい教育コースを設け、そこから学究と思索を重視する教育を広げていくという迂回的な方法であった。このような方法が選ばれたのは、教育の理念を損なわずに制度化するためであった。周縁部に設けられた新しいコースでは、理念を忠実にかたちにすることが可能であった。

CGSC にはそれまで続いてきた状態を維持しようとする側面があり、このため、その中心的なコースである CGSOC から改革を広げていくという方法を選択した場合、新しい教育理念とその実践が中和されるおそれがあった。とりわけ、CGSOC の学生数は彼らが卒業後に配置されるポストの数にあわせて毎年約 900 名と定められており、この規模が少人数制教育の導入を困難にしていた。こうした背景があったことから、高級将校たちは CGSOC ではなく、その周縁部に新設されたコースを選び、そこで自分自身であれこれ力を尽くしながら、次の戦いに勝利するために必要不可欠と信じる教育理念を実現し、それを広げていったのである。

1980 年代の CGSC 改革は、教育理念をまず周縁部で制度化し、そこでの成功を足がかりとして改革を拡張していくというやり方で、少しずつ丁寧に進められたものであった。軍人の保守的な気質を言い表す言葉に、「いつの時代も軍人は次の戦争は前の戦争と同じようになると考える」という言葉がある⁴²。また、軍の構造が複雑になった現在、軍の改革はますます一筋縄ではいかなくなっている。1980 年代の CGSC 改革で採用された改革の手法は、現代にも通じる、次の戦争に備えるための教訓を示唆していると思われる。

⁴² Michael C. Thomsett and Jean Freestone Thomsett, *War and Conflict Quotations: A Worldwide Dictionary of Pronouncements from Military Leaders, Politicians, Philosophers, Writers and Others* (North Carolina: McFarland and Company, 1997), p. 112.